

令和6年度第2回小学校教科担任制推進協議会 実践交流資料

1 学校名・教科型

坂町立小屋浦小学校 9教科型

2 学校の概要

学級数及び児童数(R6.12.1現在)

	通常学級							特支 学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
児童数	12	4	15	12	8	15	66	3	69
学級数	1	1	1	1	1	1	6	1	7

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	1	2	1	2
3年1組 (担任：A)	A	A	A	A	推進	推進	A	A	A	A	A	A	A

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	1	2	1	2
4年1組 (担任：B)	B	B	B	B	推進	推進	B	B	B	B	B	B	B

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	1	2	1	2
5年1組 (担任：C)	C	C	C	C	推進	推進	推進	推進	C	C	C	C	専科

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	1	2	1	2
6年1組 (担任：D)	D	D	D	D	推進	推進	推進	推進	D	D	D	D	専科

4 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

<効果のあった取組>

① 授業の質の向上

- ・担当教科の研修に参加し、学んだことを授業改善に生かした。
- ・校内研修において、担当する音楽科の授業提案を行い、全教員が指導法について学んだ。

② 多面的に児童理解

- ・教科担任制推進教員の担当する授業や休憩時間で見られた児童の様子から、気になったことや成長、頑張りを担任に伝えるとともに、担任から学級や家庭での様子を聞くなど、教科担任制推進教員と担任が情報共有を行った。

④ 教師の負担軽減

- ・3・4年では理科・音楽の2教科、5・6年では理科・音楽・図工・家庭科の4教科を教科担任制推進教員が担当した。専門性、教材準備等に十分な時間が必要な教科を担当した。



<成果>

① 授業の質の向上

- ・教科担任制推進教員が同一教科を複数学年担当することで、系統性を踏まえた教材研究をすることができ、授業改善に生かすことができた。
- ・音楽科において、地域の行事と関連させた単元づくりをし、研究授業を行った。この研究授業を通して、指導方法だけでなく、カリキュラム・マネジメントについても提案することができ、全教員で研究を深めることができた。
- ・3～6年児童に実施したアンケートでは、「教科担任制で学ぶと勉強が分かりやすい。」と回答した児童は、96%であった。また、「教科担任制になってよかった。」と回答した児童は98%であり、その理由として、「授業が分かりやすくなった。」「その教科のことを詳しく教えてもらえる。」「分からないことがあったら、聞きに行くことができる」という回答があった。

② 多面的な児童理解

- ・毎日授業を通して、全校の半数以上の児童と関わるため、児童の細かい変化や成長を担任と密に連携することで、児童を多面的に捉えることができた。特に、配慮の必要な児童に対しては、支援方法を共通理解して指導に当たることができた。
- ・共有した情報をもとに、児童に肯定的な評価を返したり、活躍の場を設定したりすることができた。3～6年に実施したアンケートでは、「自分にはよいところがある」と回答した児童は、1学期末が88%、2学期末は95.5%であった。

④ 教師の負担軽減

- ・学級担任が担当する教科が減ることで、学級担任が担当する教科の教材研究・教材の準備に時間をかけることができ、授業の質を上げることができた。
- ・学級担任は、空きコマで学級事務や担当する分掌の仕事、児童対応・保護者連携等を行うことができ、子どもと向き合う時間を確保することができた。教員に対するアンケートにおいて、「子供と向き合う時間がある。」と回答した教員は、88.9%であった。

<課題>

① 授業の質の向上

- ・教員の指導力や学級経営力が児童の学習意欲の向上に大きく関わっているため、学力向上の基盤となる学級集団づくりや教科の指導力向上のために取組が必要である。

② 多面的な児童理解

- ・教科担任制推進教員と学級担任では、その学級の児童に関する情報を密に連携することができるが、全教員で共有することが難しい面がある。
- ・教科担任制推進教員一人が複数学年の複数教科を担当しているため、児童が中学校のような教科担任制をイメージしにくい面がある。



<対策>

① 授業の質の向上

- ・学級担任が空きコマを活用し、他学級の授業を参観する場を設定する。授業参観後、授業や学級経営に関して感想を述べたり、助言を求めたりすることで、互いの授業改善に生かしたり、学級経営の見直しを図ったりする。
- ・教科担任制推進教員と学級担任がともに、児童の興味・関心に基づき、地域の人・もの・ことを取り入れ、教科横断的な学習に取り組む。教材研究や授業準備をともに取り組むことで、個々の教員の授業力を高め、授業の質の向上を図っていく。

② 多面的な児童理解

- ・月1回の児童連絡会において、必ず各担任と教科担任教員から学級や児童の情報や指導の手立てを交流する。また、児童について気になる点があれば、週1回の暮会で伝達する。また、場合によっては、より複数の教員が見立てをし、指導の手立てを協議し、教職員で育てるという意識をもつとともに、教職員間で指導差をつくらないようにする。
- ・担任する学級の児童以外の児童と関わる機会を増やすことで、児童が担任以外の教員にも悩みや困りごとを気軽に話せる関係を築けるようにする。そのために、読書タイムに教員による読み聞かせを行う。担任は、自分が担任する学級以外の学級で読み聞かせを行う。また、担任以外の教員（教科担任制推進教員、養護教諭、管理職）も読み聞かせを行う。

